

充分ではない。今後、一そつうの研究を深める必要があるのではないか。因みに、朱氏はお茶の水女子大学の大学院（修士課程）の出身である。

以上、二冊の論文集の中から、若干の論文を採り上げて紹介したにすぎない。然し、他にも多くの興味深い論文が収められているから、関心のある方はぜひ原書を閲読して頂きたい。わが国では、本書の存在がそれ程熟知されていないので、敢て紹介を試みた次第である。最後に本論文集が今後冊をかさねて、益々充実したものになることを祈つてやまない。

(一) 一九八四年一二月、中央研究院三民主義研究所刊
A5判四五六頁 (二) 一九八六年一二月、A5判三四八
頁

アンドリュー・D・W・フォーブズ著
中国領中央アジアの軍閥とムスリム

——民国期新疆（一九一一～一九四九）の政治史——

新免康

新疆（東トルキスタン）の近現代史に関する研究は、残念ながら、余り進んでいるとは言えないのが現状であるが、最近になって二〇世紀（中華民国期）の新疆の政治史に関する本格的な研究書が現れた。それがフォーブズのこの著作である。著者は、英國リーズ大学の出身で、民国期中国西北部のムスリム分離主義に関する研究で学位を取得した氣鋭の研究者である。

本書は、本文（序第一～七章・結論）、補遺一～五、註、論著目録、索引からなる。それでは、まず、本文の内容を

序

本書のテーマが提示された後、背景となる若干の知識が述べられる。まず、本書のメイン・テーマとして、「一九一一年の清朝滅亡から一九四九年の中華人民共和国成立ま

で」の時期の、新疆の「軍閥政府とムスリムの不一致の発展と性質」サブ・テーマとしてソ連の新疆における影響力の行使と中国側の対応、新疆ムスリムへのソ連の影響が掲げられる。また、従来の研究が諸列強間の権力政治に焦点を当ててきたのに対し、著者は「民国期新疆土着の政治史を詳細にかつ始めて」分析すると宣言する。次に、新疆の地理的特徴と在住諸民族が紹介され、歴史的背景として清朝から辛亥革命までの新疆史が略述される。

第一章 新疆、一九一〇—二八年・楊增新の支配

民国期最初の新疆の支配者である楊增新の権力掌握、同期の南新疆の状況、楊增新下の経済、及び楊の暗殺が取り上げられる。まず、楊増新の経歴と新疆における権力確立過程が述べられる。次に、彼の統治の特質について、官吏任用と民族政策の観点から論ずる。特に後者に関して、ロシア（後にはソ連）とオスマン帝国からの影響の排除が基本施策であったとする。一方、南新疆ではカシュガル提督馬福興が産業の私物化や残酷な刑罰等の專制支配を行ない、罷免されたという事実が明らかにされる。他方、楊増新の経済政策は、新疆經濟を孤立させて自身の利益のために利用し、結局それを破滅に至らしめる性格のものであつたとされる。彼の支配では、支配者層の墮落・搾取が反乱寸前まで許容される一方、ムスリム反乱封じの対策が強力

に採られた。しかしながら不満は広がり、後任の金樹仁の下で爆発したという。結局楊は、部下の樊耀南に暗殺された。最後に、楊増新の政治は「民国期まで延長された」「清帝国の行政の化石化した型式」と結論される。

第二章 新疆、一九二八—三一年・コムル反乱と最初のトゥンガン侵入

第二～四章は、一九二八～三四年の大動乱の時期を扱う。この章は、大動乱の発端となつたコムル反乱の勃発とその背景、甘肅のトゥンガン軍閥馬仲英の新疆侵入について。まず、楊増新の後任主席に就任した金樹仁の支配の特徴（警察力の増強と国内監視の強化、諸事業の個人的独占、外国人の排除等）が指摘される。次に、コムル反乱の背景となつたハミ回王領の金による併合の事情が述べられ、当地ムスリムにとってのハミ回王の存在の心理的重要性と、併合後の漢人入植によるムスリム住民の不満の高まりが指摘される。コムル反乱については、発端となつた小堡事件の勃発以前にコムルの有力者ヨルバルスらによる反乱計画が存在したとされる。金樹仁の派兵により反乱が行詰ると、ヨルバルスは馬仲英を新疆に招請した。著者は、馬の経歴、ヨルバルスと馬の会談の様子を述べた後、反乱以前既に馬はコムル反乱者と関係を持ち、新疆進出計画を立てていたと推定する。新疆に侵入した馬はコムルを包囲したが、金

が組織した白系ロシア人（ロシア革命で新疆に亡命）部隊との戦闘で負傷し、甘肅に撤退した。ウイグル反乱軍も山地に退却した。以上の事実が、詳細に明らかにされる。

第三章 新疆、一九三一～三年・南部トルコ系ムスリ

ムの反乱

コムル反乱に続く南新疆のトルコ系ムスリムの反乱の経緯とそのトルコ民族主義的特質について。まず、南新疆では、楊增新によるソ連の影響の制限、カシュガル英領事の存在という条件下で、トルコ民族主義者・イスラム伝統主義者が有力で、アフガニスタンと密接な関係が醸成されたことが述べられる。次に、南新疆各地の反乱勃発と拡大の経緯——トゥンガン反乱者馬占倉とクチャ反乱指導者ティムールのクチヤ、アクス占領とカシュガル到来、ホタン反乱者のイスラム的支配の確立と勢力拡大——の詳細が明らかにされる。その後、反乱者各グループ間の対立が表面化する。まず、トゥンガンとトルコ系ムスリムの分裂が決定的となる。カシュガルでは、新城に馬占倉らのトゥンガン、旧城にティムールらトルコ系ムスリムという態勢ができ、ホタン反乱指導者で保守的トルコ民族主義者のボグラ兄弟は、前者と衝突した。更に、トルコ系ムスリム同士のティムールとホタン反乱者の間に、後者のカシュガル進出を機に軋轢が生じた。しかし、ティムールはキルギズとの対立

が元で死亡し、結局南新疆の大部分がホタン反乱者の手に帰したことが語られる。

第四章 新疆、一九三三～四年・トゥンガンの侵入、トルコ系の分離、及びソ連の干渉

疆での「東トルキスタン・トルコイスラム共和国」（TIRET）の設立、ソ連の介入に伴う動乱の最終局面について。まず、ウルムチをめぐる状況——馬仲英配下の馬世明軍の省政府所在地ウルムチへの進撃と退却、前述白系ロシアによる金樹仁追放と盛世才の督弁就任——が述べられる。次に、馬仲英が肅州での準備の後、新疆に再進軍してウルムチを攻撃し、盛の権力固めの間に盛を窮地に追込んだ経緯が語られる。一方、南新疆では、ホタン反乱者が「ムスリム国家」を標榜し分離主義的立場からTIRETを宣言した。著者は、その反ソ・反漢・反トゥンガンという非妥協的トルコイスラム的傾向を指摘する。他方、ウルムチで孤立した盛の支援要請により、ソ連は、馬仲英を通じての日本の勢力拡大とTIRETの自国内ムスリムへの影響を懸念し、赤軍を新疆に派遣、トゥンガン軍を撃破した。この後、トゥンガン軍の南新疆退却に伴うホタン軍壊滅とTIRETの滅亡、馬仲英の突然のソ連への逃走と盛世才方のカシュガル回復という事実が、すきのない目配りで叙

述される。

第五章 新疆、一九三四年・盛世才下のムスリム

と評される。

第六章 新疆、一九四四年・国民党下のムスリム

の分離主義

盛世才支配期の、ソ連の「衛星国」化した新疆の状況が明らかにされる。まず、大動乱収束後も残った、トゥンガン馬虎山のホタン地域に対する支配の特徴（強大な軍隊の維持、トルコ系住民の激しい搾取）が述べられる。次に、ウルムチの盛世才の親ソ的政策に触れた後、漢人官吏の反イスラム的政策とウイグル人官吏マフムードへの圧迫により、トルコ系住民が反乱を起してカシュガルを占領したが、結局、介入した馬虎山共々盛世才により鎮压された経緯が述べられる。こうして新疆全域を掌握した盛の下での新疆は、一九三七～四二年の間、ソ連の「衛星国」と化したという。それは赤軍のコムル駐留、ソ連の飛行機工場建設、英國の影響力の排除、スターリン肅清を真似た盛の政策等に表れており、ソ連の目的は特に鉱産物の採掘・収得にあつたとされる。著者は、盛世才の政策を「進歩的」とする従来の評価を否定し、「改革」は実質を伴わず、ムスリム住民を圧迫する政策だと論ずる。そして、盛の第二次世界大戦中の動搖——支持母体の国民党への転換、ソ連への再転換の失敗——と失脚の経緯が述べられる。最後に、盛の支配期が、ムスリムが迫害された「長引いた恐怖の時代」と妥協を図ったソ連の政治的意図が、特に国共内戦との関

国民党の新疆掌握、イリ地域の反乱の勃発と発展、国民党とイリ反乱者との和解について。まず、新疆が国民党支配下に入り、インフレの昂進、官吏の墮落、国民党の貿易独占、軍隊膨脹に伴う収奪の強化、漢人の入植等がトルコ系ムスリムの不満を高めたことが指摘される。次に、オスマンらカザフの反乱に触れた後、イリ反乱の経緯——ニルカ蜂起の勃発、親ソ的人物アフマド・ジャヤン指導下の反乱組織化、イリの占領、「東トルキスタン共和国」（ETR）の成立——が明らかにされる。著者は、保守的トルコイスラム的グループと親ソ的グループという反乱参加者のうち、やがて後者が主導権を握り、国家的体裁を整えたと見られる。また、反乱者が創立した「イリ民族軍」が、装備的に優勢なはずの国民党軍を撃退していく背後に、ソ連の人道的・物的援助があつたと見る。その後、反乱軍のウルムチ接近を前に国民党本部が派遣した張治中とイリ反乱者との交渉の結果、反乱側の省行政への参加、反乱地域での警察権の独立、一部反乱軍の政府軍への編入、ETRの消滅等の条件で休戦が実現する。その際、事実上讓歩して国民党と妥協を図ったソ連の政治的意図が、特に国共内戦との関

連で分析される。

第七章 新疆、一九四六年・共産主義者の政権取

得前夜のムスリム

国民党とイリ反乱側の和解で成立した「連合政府」の崩壊、中ソ国境での「北塔山事件」、新疆での共産党権力の確立について。まず、この「連合政府」下の状況——政府的人的構成、連合政府主席張治中採用の諸改革への国民党官吏の反発、イリ地区でのソ連の影響力の一層の顕著化、南西地区のムスリム反乱——が述べられる。次に、妥協的政策で孤立した張治中がウルムチの騒擾中に解任され、後任のウイグルのマスウード・サブリも国民党の傀儡としてウイグルの憤激を買い、結局連合政府は崩壊したこと、イリ反乱を離脱し国民党側に移ったオスマンらカザフとモンゴル人民共和国軍との衝突が中ソ勢力争いの一環として起つた（北塔山事件）ことが述べられる。更に、再分離した国民党支配地域とイリ地域の各々の政治的状況が推定された後、国共内戦での共産党的優勢を睨んでのソ連と国民党との交渉とその決裂を経て、一九四九年に人民解放軍が新疆に進駐したことが語られる。最後に、アフマドジヤンら親ソ的ムスリムの「飛行機事故」死によつてソ連の影響力が消滅し、ヨルバルスやオスマンら「右翼」ムスリムも排除されて、中国共産党権力が新疆を完全に掌握了事情が述べられる。

べられる。

結論

これまで述べられてきた政治史がほぼそのままの順に要約される。まず、楊增新の時代は、時代錯誤の政策による「繁榮なき平和の時期」と評される。次に、第二～四章のムスリム反乱の時期について、各反乱者に共通の目的があつたとする従来の叙述は不十分で、コムル地域、タリム盆地地域、イリ地域という三地域の差異に着目する必要があると説く。即ち、コムル反乱では、中国への親近性から金樹仁の排除のみが目的とされ、当初はトゥンガンとの協力関係が存在したのに対し、分離主義者が優勢なタリム盆地の反乱では、新たに国家組織が設立され、非妥協的トルコイスラム的傾向が顕著だったとされる。一方、著者は、動乱の収束とその後の盛世才の親ソ的支配を略述した後、イリ反乱と東トルキスタン共和国を、ソ連が以前のイリ地域での権益を回復するため「煽動」したものであると、明確に断定する。そして、人民解放軍の進駐により新疆に確立した中国共産党権力は、「右翼」ムスリムだけでなく、イリの「左翼」ムスリムをも排除して、中国による新疆支配を完成し、以後、トルコムスリムによる分離主義は終わりを告げたとされる。

以上が本書本文の主な内容である。それでは次に、本書の特徴を指摘した上で、若干の意見を述べようと思う。その際、具体的な叙述の逐一に立に入る余裕はないので、全般的な問題に限りたいと思う。

第一に、史料についてである。まず、第三～五章の南新疆の政治的状況に関する記述に際し、英國インディア・オフィス図書館の史料が効果的に利用されている点が、注目される。特に、カシュガル領事の報告等に基づき、南新疆のムスリム反乱について詳細に事実関係を究明し、反乱の性格を明らかにしている部分（第三章第二～四節、第四章第三・五節）は、他書に見られぬ叙述であり、本書の最大の長所と言つても過言ではないだろう。但し、詳細な事件史の事実の発掘に主に叙述の中心が置かれているのはいささか残念である。尚、この史料の利用は、「東トルキスタン共和国」の性格を特定する上でも役立っている。また、歐米文の史料が正に隈なく網羅され、具体的叙述に遺憾なく利用されている点は、当然とはいえ評価に値する。

これに対し、用いられていない中國語史料が幾つかあるのは何故だろうか。特に楊增新「補遺文獻」が利用されていないのは、全く腑に落ちない。確かに、この史料を使うことにより、第一章結論部における最終的な楊增新評価に大きな変更を加える必要がでてくるとは言えないかもし

れない。しかし、最も基本的な史料の未利用が叙述自体の「実証性」を減ずることは疑いないし、楊の経済政策や対外政策の主観的意図を論じていては説得力に欠ける印象を与える。これは、包爾漢（最後の民国期新疆省主席で最初の省人民政府主席となつた人物）が「新疆五十年」で、この史料を用いることにより、彼の政治の特質を浮彫りにしているのと対照的である。更に、トルコ系住民の民族主義形成に関連して、トルコ語史料の利用が不十分であることも、この著作の史料面での弱点となつていて。

また、本書が発刊される少し前に出された、前述の「新疆五十年」（一九八四年）とハミード・ウツラ・タリムの「トルキスタンの歴史」（一九八三年？）も用いられていない。本書とほぼ同時代の新疆史をカヴァーするこの二書は、全く異なる立場からなされた叙述であり、しかも著者の実見聞に基づく非常に興味深い記事を含んでいる。特に、後者は、大動乱の時期に關するムスリム側から見た詳細な記述を含んでいる（その紹介は勿論別稿に譲らねばならない）。

これが注目される。このような重要な二書が用いられていない理由は、恐らく原稿完成後にこれらの書が発刊されたということであつて、当然ながら、著者に責任はない。しかし、これら二書の発刊を待つて書かれた方がより完全な叙述になつたことは言つまでもなく、いささか惜しまれる。

第二に、全体的な叙述内容・様式についてである。前述の紹介を一瞥すればわかるように、かなり忠実に年代順に政治史を叙述している。その際、多彩な史料を総合的に駆使して事件の経緯とその原因を明らかにしていく手腕は見事である。特に、複数の史料の記事に異同がある場合、でかける限り論理的・批判的な手続きを経て事実を確定しようと努力している。従つて、政治事件史の叙述としては、学問的信頼度が高いと言える。

しかしながら、ムスリム住民を主な居住者とする新疆の歴史を組立てるという観点からは、多少問題点もあるようと思う。まず、扱う時期を中国史の区分にそのまま従つて民国期のみに限定していることが挙げられる。これは新疆の歴史を扱う上では、いまだ便宜上の前提にしか過ぎないだろう。次に、ムスリム住民についての叙述に若干不満がある。著者は、基本的には漢人支配者の交代にかなり忠実に沿った章別編成をとっているが、ムスリム住民の動向を、軍閥政府のそれより寧ろ詳細に描き出す。特に、大動乱期の南新疆のムスリム反乱について、一章を割いている（第三章）。そういう点は、高く評価されよう。しかし、全体として見た場合、本書のムスリムに関する叙述は、年代順の政治事件史の叙述の中に埋没し、歴史叙述を立体的に構築することに、うまく生かされていない印象を与える。

例えば、ムスリム住民の漢人支配者との関係についての叙述にしても、恐らくは対立・依存・無関心等を含みつつ重層的に存在したその関係の諸様相を、明確なヴィジョンの下に再現しつつ進められているとは言い難い。そしてこのことは、ムスリム社会が漢人による植民の進行やいわゆる「近代化」の波の中で、どのように変容し、またしなかつたのか、という問題や、ムスリム各階層・各人がそのような諸条件との関わり合いの中から、どのように主体的な活動を展開していくのか、といった問題に本書が触れる所が少ないこととも、無関係ではあるまい。

著者は、新疆自体を中心とした「土着」の政治史を「始めて」分析すると序で宣言しており、それをある程度実現させていると思う。しかし、「新疆土着の政治史」をより根本的に読み解くためには、本書のよくなarrationの様式と共に、中央アジアのムスリム住民を主体とする歴史を再構成するための革新で明解なパラダイムが新たに必要ではないだろうか。或いは、ムスリムの分離主義或いは民族主義にテーマを絞つて分析を行つた方が、ムスリムの動向に関する詳細な記述が生かされ、とりえずは前述の「宣言」の趣旨により合致する叙述が得られたかも知れない。いずれにせよ、以上の諸点を考えれば、著者の歴史理解は本書で見る限りではさか月並であつて、本書が基本的には支配者

の交代に沿つた政治事件史の叙述以上を出ない、といふ印象を抱くのは私だけであろうか。

以上、第一に史料、第二に叙述スタイルと云う画面から、全般的な問題に限つて本書を眺めてきた訳だが、第三に、若干細かい点について付言しておこうと思う。まず「学術書」であるにも拘らず、総計三三枚、一二頁に及ぶ写真が随所に挿入されていることが注目される。これは、特に人物についてヴィジュアルな具体的イメージを得るのを助けており、寧ろ歓迎されるべきことであろう。次に「補遺」についてだが、補遺一の「民国期新疆の人名録」は、本書で扱われている時期の主な人物について a b c 順に経歴等を紹介したもので、有用である。一方、補遺二「TIRE T の憲法と組織」と三「クルジャのETRの構造と組織についての覚え書」は、「補遺」という形ではなく、寧ろ本文の該当する部分に挿入し、それによつて一貫した本文の叙述を目指すべき性質のものではないだろうか。そうするとにより、ムスリムの「分離主義」への我々の体系的的理解を助けることができると思ふ。

最後に、本書を一言で評するとすれば、中華民国期に限定された新疆の歴史に関する、ほぼ忠実に年代順になされた詳細な學問的叙述と言えよつ。この書をもつて民国期新疆の詳細な通史が得られたことの意義は大きい。また、

政治事件史の叙述としての信頼度の高さと、南新疆ムスリムの動向に関する今までにない詳細な記述は、高く評価されよう。そういう点から言えば、本書が新疆の現代史を研究しようとする場合、まず第一に参考とされるべき著作であることは間違ひない。ただ、著者未利用の史料も用いて、ムスリム居住地域としての新疆の近現代の歴史を、より明確な問題意識の下に、より体系的に描き出す仕事は、将来の我々に残されていくと言えよう。

Forbes, Andrew D.W., *Warlords and Muslims in Chinese Central Asia—A political history of Republican Sinkiang 1911-1949*, Cambridge University Press, 1986, pp. 376.